

むかし、摂津国の難波という所に、夫婦の者が住んでおりました。子供が一人も無いものですから、住吉の明神さまに、おまいりをしては、

「どうぞ子供を一人おさずけ下さいまし。それは指ほどの小さな子でもよろしゅうございますから。」

と一生懸命にお願い申しました。

すると間もなく、お上さんは身持ちになりました。

「わたしどものお願いがかなったのだ。」

と夫婦はよろこんで、子供の生まれる日を、今日か明日かと待ちかまえていました。

やがてお上さんは小さな男の赤ちゃんを生みました。ところがそれがまた小さいといつて、ほんとうに指ほどの大きさしかありませんでした。

「指ほどの大きさの子供でも、と申し上げたら、ほんとうに指だけの子供を明神さまが下さった。」

と夫婦は笑いながら、この子供をだいじにして育てました。ところがこの子は、いつまでたつてもやはり指だけより大きくはなりませんでした。夫婦もあきらめて、その子に一寸法師と名前をつけました。一寸法師は五つになつても、やはり背がのびません。七つになつても、同じことでした。十を越しても、やはり一寸法師でした。一寸法師が往來を歩いていると、近所の子供たちが集まつてきて、

「やあ、ちびが歩いてる。」

「ふみ殺されるなよ。」

「つまんでかみつぶしてやろうか。」

「ちびやい。ちびやい。」

と口々にいつて、からかいました。一寸法師はだまって、にこにこしていました。

一寸法師は十六になりました。ある日一寸法師は、おとうさんとおかあさんの前へ出て、

「どうかわたくしにお暇を下さい。」

といいました。おとうさんはびっくりして、

「なぜそんなことをいうのだ。」

と聞きました。一寸法師はとくいらしい顔をして、

「これから京都へ上ろうと思います。」

といいました。

「京都へ上ってどうするつもりだ。」

「京都は天子さまのいらっしゃる日本一の都ですし、おもしろいしごことがたくさんあります。わたくしはそこへ行って、運だめしをしてみようと思います。」

そう聞くとおとうさんはうなずいて、

「よしよし、それなら行っておいで。」

と許して下さいました。

一寸法師は大へんよろこんで、さっそく旅の支度にかかりました。まずおかあさんにぬい針を一本頂いて、麦わらで柄とさやをこしらえて、刀にして腰にさしました。それから新しいおわんのお舟に、新しいおはしのかいを添えて、住吉の浜から舟出をしました。おとうさんとおかあさんは浜へまで見送りに立って下さいました。

「おとうさん、おかあさん、では行ってまいります。」

と一寸法師がいつて、舟をこぎ出しますと、おとうさんとおかあさんは、

「どうか達者で、出世をしておくれ。」

といいました。

「ええ、きつと出世をいたします。」

と、一寸法師はこたえました。

おわんの舟は毎日少しずつ淀川を上って行きました。しかし舟が小さいので、少し風が強くと吹いたり、雨が降って水かさが増したりすると、舟はたびたびひっくり

返りそうになりました。そういう時には、しかたがないので、石垣の間や、橋ぐいの陰に舟を止めて休みました。

こんな風にして、一月もかかって、やっとのことで、京都に近い鳥羽という所に着きました。鳥羽で舟から岸に上がると、もうすぐそこは京都の町でした。五条、四条、三条と、にぎやかな町がつづいて、ひっきりなしに馬や車が通って、おびただしい人が出ていました。

「なるほど京都は日本一の都だけあって、にぎやかなものだなあ。」

と、一寸法師は往来の人の下駄の歯をよけて歩きながら、しきりに感心していました。

三条まで来ると、たくさんりっぱなお屋敷が立ち並んだ中に、いちばん目にたつてりっぱな門構えのお屋敷がありました。一寸法師は、

「なんでも出世をするには、まずだれかえらい人の家来になって、それからだんだんにし上げなければならぬ。これこそいちばんえらい人のお屋敷に違いない。」

と思つて、のこのこ門の中に入っていききました。広い砂利道をさんざん歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の宰相殿といつて、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

そのとき一寸法師は、ありつたけの大きな声で、

「ごめん下さい。」

とどなりました。でも聞こえないとみえて、だれも出てくるものがないので、こんどはいつそう大きな声を出して、

「ごめん下さい。」

とどなりました。

三度めに一寸法師が、

「ごめん下さい。」

とどなった時、ちようどどこかへおでましになるつもりで、玄関までおいでになった宰相殿が、その声を聞きつけて、出てごらんになりました。しかしだれも玄関には居ませんでした。ふしぎに思つてそこらをお見回しになりますと、靴ぬぎ

にそろえてある足駄の陰に、豆粒のような男が一人、反り身になってつつ立っていました。宰相殿はびっくりして、

「お前か、今呼んだのは。」

「はい、わたくしでございます。」

「お前は何者だ。」

「難波からまいりました一寸法師でございます。」

「なるほど一寸法師に違いない。それでわたしの屋敷に来たのは何の用だ。」

「わたくしは出世がしたいと思つて、京都へわざわざ上つてまいりました。どうぞ一生懸命働きますから、お屋敷でお使いなさつて下さいまし。」

一寸法師はこういって、ぴよこんとおじぎをしました。宰相殿は笑いながら、

「おもしろい小僧だ。よしよし使つてやろう。」

とおっしゃつて、そのままお屋敷に置いておやりになりました。

三

一寸法師は宰相殿のお屋敷に使われるようになってから、体こそ小さくても、まめまめしくよく働きました。大へん利口で、気が利いているものですから、みんなから、

「一寸法師、一寸法師。」

といつて、かわいがられました。

このお屋敷に十三になるかわいらしいお姫さまがありました。一寸法師はこのお姫さまが大好きでした。お姫さまも一寸法師が大そうお気に入り、どこへお出かけになるにも、

「一寸法師や。一寸法師や。」

といつて、お供にお連れになりました。だんだん仲がよくなるうち、何といつても二人とも子供だものですから、いつかお友達のようになつて、時々はけんかをしたり、いたずらをし合つて、泣いたり笑つたりすることもありました。ある時またけんかをして、一寸法師が負けました。くやしませに一寸法師は、そつとお姫さ

まが昼寝をしておいでになるすきをうかがって、自分が殿さまから頂いたお菓子を
残らず食べてしまつて、残った粉をお姫さまの眠っている口のはたになすりつけて
おきました。そして自分からはらつぽになったお菓子の袋を手にとって、お庭の真ん
中に出て、わざと大きな声でおいおい泣いておりました。その声を聞きつけて、殿
さまが縁側へ出ていらしつて、

「一寸法師、どうした。どうした。」

とお聞きになりました。

すると一寸法師は、さも悲しそうな声をして、

「お姫さまがわたくしをぶつて、殿さまから頂いたお菓子をみんな取つて食べて
おしまいになりました。」

といました。

殿さまはびっくりして、お姫さまのお部屋へ行つてごらんになりますと、お姫さ
まは口のはたにいっぱいお菓子の粉をつけて、眠つておいでになりました。

殿さまは大そうおおこりになつて、おかあさんと呼んで、

「何だつて、姫にあんな行儀の悪いまねをさせるのだ。」

ときびしくおしかりになりました。するとこのおかあさんは、少しいじの悪い人
だったものですから、お姫さまのために自分がしかられたのを大そうくやしがりま
した。そしてくやしませに、ありもしないことをいろいろとこしらえて、お姫さ
まが平生大臣のお娘に似合わず、行儀の悪いことをさんざんに並べて、

「いくら止めても、ばかにしていることをちつとも聴かないのです。」

とおいいつけになりました。

宰相殿はなおなおおこりになつて、一寸法師にいつけて、お姫さまをお屋敷
から追い出して、どこか遠い所へ捨てさせました。

一寸法師はとんだことをいい出して、お姫さまが追い出されるようになったので、
すっかり気の毒になつてしまいました。そこでどこまでもお姫さまのお供をして行
くつもりで、まず難波のおとうさんのうちへお連れしようと思つて、鳥羽から舟に
乗りました。すると間もなく、ひどいしけになつて、舟はずんずん川を下つて海の

方へ流されました。それから風のまにまに吹き流されて、とうとう三日三晩波の上で暮らして、四日めに一つの島に着きました。

その島には今まで話に聞いたこともないようなふしぎな花や木がたくさんあって、いったい人が住んでいるのかいないのか、いっこうに人らしいものの姿は見えませんでした。

一寸法師はお姫さまを連れて島に上がって、きよろきよろしながら歩いて行きますと、いっどこから出てきたともなく、二匹の鬼がそこへひよっこり飛び出してきました。そしていきなりお姫さまにとびかかって、ただ一口に食べようとしました。お姫さまはびっくりして、気が遠くなってしまうました。それを見ると、一寸法師は、例のぬい針の刀をきらりと引き抜いて、ぴよこんと鬼の前へ飛んで出ました。そしてありったけの大きな声を振り立てて、

「これこれ、このお方をだれだと思おう。三条の宰相殿の姫君だぞ。うっかり失礼なまねをすると、この一寸法師が承知しないぞ。」

とどなりました。二匹の鬼はこの声に驚いて、よく見ますと、足もとに豆っ粒のような小男が、いばり返って、つつ立っていました。鬼はからからと笑いしました。

「何だ。こんな豆っ粒か。めんどろくさい、のんでしまえ。」

というが早いか、一匹の鬼は、一寸法師をつまみ上げて、ぱっくり一口にのんでしまいました。一寸法師は刀を持ったまま、するすると鬼のおなかの中へすべり込んでいきました。入るとおなかの中をやたらにかけずり回りながら、ちくりちくりと刀でついて回りました。鬼は苦しがつて、

「あッ、いたい。あッ、いたい。こりやたらまん。」

と地びたをころげ回りました。そして苦しまぎれにかつと息をするはずみに、一寸法師はまたぴよこりと口から外へ飛び出しました。そして刀を振り上げて、また鬼に切っかかりました。するともう一匹の鬼が、

「生意気なちびだ。」

といっって、また一寸法師をつかまえて、あんぐりのんでしまいました。のまれながら一寸法師は、こんどはすばやく躍り上がって、のどの穴から鼻の穴へ抜けて、

それから眼のうしろへはい上がって、さんざん鬼の目玉をつつきました。すると鬼は思わず、

「いたい。」

とさけんで、飛び上がったはずみに、一寸法師は、目の中からひよいと地びたに飛び下りました。鬼は目玉が抜け出したかと思つて、びっくりして、

「大へん、大へん。」

と、後をも見ずに逃げ出しました。するともう一匹の鬼も、

「こりやかなわん。逃げろ、逃げろ。」

と後を追つて行きました。

「はッは、弱虫め。」

と、一寸法師は、逃げて行く鬼のうしろ姿を気味よさそうにながめて、

「やれやれ、とんだことでした。」

といいながら、そこに倒れているお姫さまを抱き起こして、しんせつに介抱しました。お姫さまがすっかり正気がついて、立ち上がるうとしますと、すそこらころと小さな槌がころげ落ちました。

「おや、ここにこんなものが。」

と、お姫さまがそれを拾つてお見せになりました。

一寸法師はその槌を手にとって、

「これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何でもほしいと思ふものが出てきます。ごらんなさい、今ここでわたしの背を打ち出してお目にかけますから。」

こういつて、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、

「一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ。」

といいながら、一度振りますと背が一尺のび、二度振りますと三尺のび、三度めには六尺に近いりっぱな大男になりました。

お姫さまはそのたんびに目をまるくして、

「まあ、まあ。」

といつておいでになりました。

一寸法師は大きくなったので、もううれしくつてうれしくつて、立ったりしゃがんだり、うしろを振り向いたり、前を見たり、自分で自分の体をめずらしそうにながめていましたが、一通りながめてしまうと、急に三日三晩なんにも食べないで、おなかのへっていることを思い出しました。そこでさつそく打ち出の小槌を振って、そこへ食べきれないほどのごちそうを振り出して、お姫さまと二人で仲よく食べました。

ごちそうを食べてしまうと、こんどは金銀、さんご、るり、めのうと、いろいろの宝を打ち出しました。そしていちばんおしまいに、大きな舟を打ち出して、宝物を残らずそれに積み込んで、お姫さまと二人、また舟に乗って、間もなく日本の国へ帰って来ました。

四

一寸法師が宰相殿のお姫さまを連れて、鬼が島から宝物を取って、めでたく帰って来たといううわさが、すぐと世間にひろまって、やがて天子さまのお耳にまで入りました。

そこで天子さまは、ある時、一寸法師をお召しになってごらんになりますと、なるほど気高い様子をしたりっぱな若者でしたから、これはただ者ではあるまいと、よくよく先祖をお調べさせになりました。それで一寸法師のおじいさんが、堀河の中納言というえらい人で、むじつの罪で田舎に追われて出来た子が、一寸法師のおとうさんで、それからおかあさんという人も、やはりもとは伏見の少将といった、これもえらい人の種だということが分かりました。

天子さまはさつそく、一寸法師に位をおさづけになって、堀河の少将とお呼ばせになりました。堀河の少将は、改めて三条宰相殿のお許しをうけて、お姫さまをお嫁さんにもらいました。そして摂津国の難波から、おとうさんやおかあさんをお呼び寄せて、うち中がみんな集まって、楽しく世の中を送りました。